

しゆうちゆうしき
舟中子規を聞く（城野静軒）

やわた やまざき はる く
八幡山崎春暮れんと欲す

とけん ち な らつか なが
杜鵑血に啼いて落花流る

いつせい つき あ いつせい みず
一声は月に在り一声は水

せいり りじん はんや ふね
声裡の離人半夜の舟

八幡山崎春欲暮 杜鵑啼血落花流
一聲在月一聲水 聲裡離人乎夜舟

解説 舟で京都から大阪へ淀川を下る折、月明に杜鵑ほととぎすの声を聞いての作。

語釈 ※子規ほととぎす。※八幡山崎ほととぎす。天王山の東麓にあつて淀川に臨み、かつては京阪を結ぶ交通の要衝であつた。

※杜鵑暗血ほととぎすの暗き声は哀切で血を吐くように聞こえるのでいう。※一声在月ほととぎす藻風の「さてはあの月が啼いたかほととぎす」の句を踏まえている。また、後徳大寺実則さねのりの「ほととぎす暗きつる方を眺むればただ有明の月ぞ残れる」の歌からきている。

通釈 春も過ぎようとする頃、山すそに眠る八幡・山崎を通過中、血を吐くような杜鵑ほととぎすの声、川面には夜目にも落花が静かに流れてゆく。一声は月が啼いたか、と思われ、一声は水中から発したようでもある。杜鵑ほととぎすの声は実に聞く者の腸も断たんばかりに悲しませるものであるが、まして故郷を離れているこの身にとって夜半の舟中の感慨はひとしお痛切なものがある。